

日中医療交流便覧

発行年月日

2014年3月1日

編集

岡山県精神科医療センター

河南科技大学第五附属病院

協力

岡山大学病院

岡山旭東病院

発行

岡山市日中友好協会

日本側編集者序文

「なぜ日本と中国との間で医療交流をするのか？」 これは実はとてつもない難問である。難しい問題に答える方法は1つだけとは限らない。ある人々は「理論」に拠り所を求め、体系的な理論の力でその問題を解決しようとするかもしれない。別の人々は、頭で考えることはほどほどにして実際に行動しながら、自然と見えてくる問題解決のヒントを捕えていこうとするかもしれない。いろいろな方法がとれるということこそが、人間の叡知である。

日本と中国の社会は大きく異なっている。医療の実態も大きく異なっている。そうした中で、日本の医療者が中国の医療から学ぶことは何か？ 中国の医療者が日本の医療から学ぶことは何か？ これらを理論的に問い続けることは、有意義であり尊いことである。

他方、医療の神髄は実践にある。そのことは万国共通である。また、病苦に悩む患者の心境、患者の癒やしに力を注ぐ医療者の姿勢、医療という活動の公共性、これらは国や社会が違っても、人間の営みとして本質は変わらないはずだ。根本的な価値観を共有する医療者どうしが交流することは、お互いの視野を広げ力量を高めることにつながる。

岡山市と洛陽市の30年余にわたる友好都市関係の基盤の上に立って、医療分野でも交流を進めようと洛陽の医療関係者から働きかけがあったのは2010年のことである。以後、岡山・洛陽それぞれの複数の医療機関の間で交流が模索され、徐々に実践に移されてきた。

精神科医療の分野では、2011年に岡山県精神科医療センターと洛陽市第五人民医院（当時。現在は、河南科技大学第五附属医院。以下、「第五医院」と記す。）との間で、相互に友好病院となる協力協定が取り交わされた。

以後、数次にわたる相互の幹部職員等の訪問・見学を経て、2013～2014年には、2つの大きな進展があった。

第一に、2～3か月に及ぶ相互の専門家の交流滞在の実現である。2013年7～9月の間、岡山県精神科医療センターの関英一医監（精神科医）が洛陽に滞在し、第五医院と洛陽市第一中医院で交流を行った。また、第五医院からは、魏曉艶医師（精神科医）が2013年11月～2014年1月の間、岡山県精神科医療センターに滞在し、併せて岡山大学病院、岡山旭東病院を始めとする数多くの医療機関や関係機関を訪問して交流を行った。両交流滞在には洛陽市の王芳さんが通訳者として常時同行し、コミュニケーション面での困難を克服して交流を有意義なものとするうえで多大な貢献をされた。

第二に挙げられるのが、この「日中医療交流便覧」（以下、「便覧」と記す。）の取りまとめである。本便覧は、次の点で日中交流の歴史の中でも前例のない画期的な資料であると考えている。

- ・日本と中国の医療機関による共同編集であること
- ・日本語と中国語の対訳であること
- ・医療現場の実践に即した記述と制度面の記述の両方が盛り込まれていること
- ・交流関係者の参考資料であると同時に幅広く両国国民に情報提供されること

第五医院の王輝院長には、共同編集者となることをご快諾いただき、第五医院スタッフの方々から内容についての丁寧な査読と助言をいただいた。第五医院の関係各位にも厚く御礼申し上げたい。

日本と中国の間には、二千年以上にわたる交流の年輪がぎざまれており、互いに切っても切れない関係にある。日中関係に一時的な波風がたったとしても、両国国民の知恵と努力で乗り越えていくことができるはずである。

国際情勢はいかにあれ、個人と個人、組織と組織の交流を通じて相互に友情、信頼、尊敬を交わしていくことは、崇高で普遍的な価値をもつ。それを形成し増進し維持していくことは、私たち一人一人の心の姿勢にかかっている。

本便覧が、今後の日中医療交流の礎として大いに活用されることを心から祈念するものである。

地方独立行政法人岡山県精神科医療センター
理事長 中島豊爾

関係者への感謝のこぼ

この便覧取りまとめに際し以下の方々が高された貢献に対する敬意と感謝を表したい（敬称略）。

（日本側）

- ・土井章弘・岡山旭東病院院長、岡山市日中友好協会医療交流促進委員会委員長：交流推進に発揮された指導力、便覧の編集協力者となることへの快諾
- ・槇野博史・岡山大学病院院長：交流全般への理解、便覧の編集協力者となることへの快諾
- ・関英一・岡山県精神科医療センター医師：全編にわたる執筆と日本語のエディター
- ・奈須翔子・社会福祉法人旭川荘（在岡山）職員：全編にわたる中国語翻訳と中国語のエディター
- ・志茂香代子・岡山県精神科医療センター職員：中華人民共和国精神衛生法の日本語翻訳
- ・西本佳乃・岡山県精神科医療センター職員：便覧冊子版の表紙デザイン考案

（中国側）

- ・王輝・河南科技大学第五附属医院院長：交流推進に発揮された指導力、便覧の共同編集者となることへの快諾
- ・魏冬・河南科技大学第五附属医院副院長：中国・洛陽編の内容チェック
- ・連卓・河南科技大学第五附属医院主任：中国・洛陽編の内容チェックと両院間の円滑な連絡の確保
- ・魏曉艷・河南科技大学第五附属医院医師：全編にわたる内容チェック
- ・王芳・医療通訳者：全編にわたる中国語翻訳の確認

また、関、魏両医師に加え、これまでの岡山・洛陽間相互の交流滞在を实地に行われた以下の方々の名前をここに掲げて、彼らの努力と歴史的役割に敬意を表したい。

（日本側）

- ・佐藤元美・岡山旭東病院医師（脳神経外科主任医長）
- ・井上マサヨ・岡山旭東病院看護師（看護課長）

（中国側）

- ・談華・洛陽市中心医院医師（脳神経外科副主任）
- ・王麗莉・洛陽市中心医院看護師（脳神経外科看護師長）

加えて、岡山から洛陽への交流滞在者の受入に際し、特段のご理解をいただき、指導力を発揮して有意義な交流滞在の実現に尽力いただいた以下の方々のお名前をここに掲げて謝意を表したい。

- ・石莉・洛陽市第一中医院院長
- ・付江・洛陽市第一中医院副院長
- ・李亚伟・洛陽市中心医院院長
- ・戴剛・洛陽市中心医院脳神経外科主任医師

さらに、この便覧は、岡山市・洛陽市間の日中友好の礎があって初めてとりまとめが可能となったものである。両市間の友好・交流に尽力されてきた以下の方々に特段の感謝の念を申し述べたい。

（日本側）

- ・片山浩子・岡山市日中友好協会会長
- ・黒住昭子・岡山市日中友好協会副会長
- ・松井三平・岡山市日中友好協会事務局長

（中国側）

- ・劉典立・洛陽市人民対外友好協会会長
- ・王建軍・洛陽市人民対外友好協会常務副会長
- ・蔡志・洛陽市人民対外友好協会秘書長
- ・蔣崇陽・洛陽市外事僑務服務センター主任
- ・于愛紅・洛陽市外事僑務服務センター事務室主任

最後に、岡山と洛陽の間の医療交流が今日の到達点に漕ぎ着けるまでには、ここにお名前を掲げきれなかった更に数多くの方々の熱意と努力が注ぎ込まれている。また、今後は、洛陽に限らず河南省鄭州市や駐馬店市の医療機関が日中医療交流に加わることも視野に入っている。こうした大きな流れの中で、日中医療交流に関心をもち、勉強し、参画しようとするすべての人々に敬意を表したい。

(中島豊爾 筆)

中国側編集者序文

中国で2014年の新年（春節）を祝うこの時期、岡山県精神科医療センター関英一先生執筆による「日中医療交流便覧」が完成したことを聞き嬉しく思います。洛陽で準備していた本書が岡山で完成されるまで僅か数か月間だったことに驚くとともに、本書が岡山県精神科医療センターと河南科技大学第五附属医院の友好交流が結んだ成果であることを喜んでいきます。

関英一先生は2013年7月から9月の間、河南科技大学第五附属医院で研修され、両院間の友好の懸け橋の第一号となりました。その謹厳な学風、勤勉の精神、高いプロ意識、謙虚な人となりは、深くかつ素晴らしい印象を残し、私個人だけでなく全職員により影響を与えました。

洛陽滞在中、関先生とは幾度も意見を交わしました。日中の精神科診療には多くの違いが存在し、戸惑いも感じたと思いますが、だからこそ、今後両院の交流者が参考にし、環境適応の時間を短縮し、より深いレベルでの交流に集中できるよう「日中医療交流便覧」を書こうという考えが芽生えたのでしょう。まさに、創意工夫と一人の開拓者としての並々ならぬ苦心が込められています。

私は尊敬の念を込めて原稿を読ませていただきましたが、この本は大変わかりやすく、検索の利便性も指南書としての実用性も高く、大いに参考にする価値があると思いました。言葉と文化の隔たりを越えた一つの懸け橋のようで、精神科をはじめとする日中間の医学交流の良い端緒を築きました。心血と情誼を注がれた関先生に、心から感謝の意を表します。

この本の発行は、岡山県精神科医療センターと河南科技大学第五附属医院における長期にわたる友好提携の礎を築き、岡山と洛陽の医療・衛生分野における学術交流に新しいページを開いたのです。

河南科技大学第五附属医院
院長 王 輝